

重なる現実—ドイツで活動している日本人でもある女性作家たちの作品

今年は何にかと映画シリーズやビデオアートの上映イベントをキュレーションする機会に恵まれ、おかげでたくさんの作品たちに出会った。ほとんどがドイツで暮らす映像作家の作品であるが、ハンガリー、スペイン、トルコ、フランス、日本などと作家たちの出身地は様々だ。それだけベルリンという街に各国からの人たちが集まり、国際的であると言えるかもしれないが、もっと見分けを付けると、スペインと言ってもバスク人、トルコと言ってもクルド人、出身国でもマイノリティーである人たちが中にはいるし、ハンガリー人と言ってもドイツ育ちの二世であったり、グローバルな社会になるほどローカルな話を耳にするし、マイノリティーや共同体と言った概念を考え直すことが多い。映像作品にもそういう経験と想いが様々な形で反映されている。日本でも他の文化や習慣を持つ人々が増えているが、島国であることも関係するのだろうか、外は外、内は内という考え方が強く、まだ「日本人」といった確固とした国民像があるような印象を受ける。陸続きのヨーロッパでは当然それではつとまらない。「海外」という表現もない。海の向こうの遠くの人ではなく、電車で一時間の所の人だったりするわけだ。しかし日本人と言ってもドイツに住む日本人がいる。日本人と言ってもドイツ生まれ育ちだったりする。日本人とドイツ人のハーフの人もある。ハーフと言っても日本で独逸学園に通い、大学生時代はドイツで過ごし、今ではアメリカとドイツの間を行き来している人がいる。そんな人たちが映像作品を作り、自分と日本の関係、個人的な経験と共同体の記憶の関係性などを考え、映像や写真として記録された瞬間の解釈と意味を問い、また自ら映像を撮り、世界に発信する。今回はそんな作家たちの作品を紹介したい。いずれも女性作家であり、ドキュメンタリー的素材を用いて詩的及び連想的な見方を提供する短編作品だ。

一本は数年前からドイツのケルンに住む中沢あきの『願いをひく』（2006年）という作品だ。映像はたったのワンカット、ローアングルから撮ったひとつの窓とその向こうに見える青空。誰もが見たことのある風景、指定された場所ではない。この映像に国際電話の会話が重ねられている。半年前にドイツに移住した日本人女性が日本の友人に久々に電話をかける。何気なく過ぎていく会話、その中で明らかになるのは、グローバル化された消費社会では日本の食料品はドイツでも手に入るし、インターネットでは常に日本の情報が見られるし、「こっちに来て人生変わるってことはないよね。」と女性の声は言う。場所が変わってもアイデンティティーというのはそう変わるものではなく、同時に取り替えがきく環境に浮遊感を覚える。そんな中、ふとした違いに感動する。日本ではあまり見られない飛行機雲がドイツではたくさん見えると言うのだ。そう言った瞬間、窓から見える青空を横切る飛行機雲が方向を変えたり、曲がったり、円を描いたりする。空に願いがひかれていく。「夢みたいな現実というか、日本のほうが今私にとっては現実みたいな夢」と女性は言う。現実、そして自分の居場所というのはどういうことか、さりげなく且つ力強くこの詩的な作品で問われる。中沢あきさんは「ドイツに住み始めて、家や故郷というものを真剣に考える機会を持った」という。

一方、Sylvia

Schedelbauer (シルヴィア・シェーデルバウア) は常に二つの文化の狭間にあったアイデンティティを持つ経験から、自分の家族の歴史を見つめるといってもプライベートな行為がまた社会の在り方を問うことに繋がる。『Erinnerungen』(思い出、2004年)という作品では、古い写真が詰まった箱を見つけたことをきっかけに、自分の家族の歴史を語る。ドイツ側の祖父の第二次世界大戦中の兵隊の姿の写真から始まり、父の貧しかった少年時代、貧困から抜け出そうと努力する姿、やがて商社より日本に派遣、実業家として成功、日本人の妻との出会い、二人の間に生まれる二人の子供たち、という三世を渡って家族の歴史が写真のみで語られる。シェーデルバウアは自分でドイツ語のナレーションをし、親が話さなかった過去を写真を頼りに破片を繋げるように再構成する。それは自分と両親に対する厳しい視線でもあるが、それより感じられるのは、歴史の不在から来る痛みである。日本でもドイツでもない二つの国の文化と歴史の狭間に置かれた作家は、自己の物語を作ることによって、20世紀の歴史を考える。両親は二人とも第二次世界大戦の加害者であった国の市民であるのに、個人的な歴史からその事実が消されたという経験から、その空白を埋めるようにこの作品は展開していく。だが最後には家族の歴史を再構築した達成感ではなく、アイデンティティの複雑さ、そして自分が戦争を知らずに育ったという事実直面、インターネットのデータベースで20世紀の世界の戦争と紛争を調べ、その途方もなく長い一覧表が作品の最後に映画のエンドロールのように流れる。

同じ作家の『Ferne

Intimität』(遠くの親密、2007年)はファウンド・フッテージを利用し、ある夢を語ることから展開していく。『Erinnerungen』より抽象的であるこの作品は、他人が撮った映像と音源をモンタージュすることによって、無関係だった昔の記録映像を意識の流れの中で組み合わせる。激しいと同時に繊細なシェーデルバウアの作品は、ある現実の記録として残っている映像や写真が誰の所有物でもなく、個人と共同体の記憶の中を漂うことを指摘する。

映像や写真といった媒体が、世界を駆け巡ることを実感させてくれるのが、Hito Steyerl (ヒト・シュタイエル) の作品『Lovely Andrea』(愛らしいアンドレア、2007年)である。

シュタイエルはベルリンに住む映像作家、芸術家であり、シェーデルバウアと同じく日本人とドイツ人の両親を持つ。20年前日本で映画の勉強をしていた頃、一度だけ緊縛モデルの仕事をしたことがある。その時の写真を探す目的で緊縛モデルでもある若い日本女性が通訳兼監督助手をつとめるという設定で風俗資料館、緊縛撮影スタジオなどを訪れる。意外なことにその写真が実際に見付かる。緊縛、ボンテージはこの作品でポルノに留まらず象徴的に扱われ、我々が資本主義の情報社会で自由であるようで如何に縛られているかがフォーカスである。スパイダーウーマンのアニメ、9.11のテロの後禁じられたスパイダーマンのティーザー広告、ニュース映像などを利用し、視覚媒体がクモの巣及び網のように絡み合っていることをユーモアに富んだモンタージュで表現することによってドキュメンタリーとフィクション、現実とメディアの関係性を考える。アンドレアとは、シュタイエルが緊縛モデル

をした時に使った偽名である。この名前は作家の若い時の仲良き友人の名前で、この実在したアンドレアは後にクルド労働者党のテロリストとしてトルコ軍に殺される。殉教者として死んだとされるアンドレアの顔写真がベルリンに住むクルド人たちのデモでポスターとして町中を運ばれ、またそのポスターがニュース映像として世界のメディア網を駆け巡る。

いずれの作品もドキュメンタリーのエッセイ映像とでも言える、現実を出発点にしたものだ。しかし現実には現実ですまないことをよく知っている。青空も、家族も、20年前の自分も、写真や映像として撮られた、捕らえられた時には現実を越え、一人歩きを始める。結局その映像になにを見るかは、語り手によって変わるし、観る側によっても変わる。また、その映像が世界を循環していく中でまた違う「真実」や「現実」が含まれることもある。日本にいる日本人にもこのような作品と出会って、自分たちの現実と同時に様々な生き方と考え方がこの世界にあることを知っていただき、そしてそれらが日本という自分たちの生活環境とも繋がっていることを感じてもらえたら幸いです。

かじむらまさよ

先週久々にいいドキュメンタリー映画を観た。監督はAysun Bademsoy、ドイツに住むトルコ人二世の女性で、10年前に撮ったドキュメンタリー映画の主人公たちを再度撮った作品だ。当時ベルリンの女子サッカーチームで懸命にボールを蹴っていたトルコ人二世の5人の女性たちが30才前後になった現在をどう生きるか、そして当時をどう見るかを、敬意を込めたやさしい眼差しで追っていく作品だ。